

日時:2017年11月3日(金・祝) 13:00~14:30

場所:太江農業センター

「 一飛騨の山城の魅力を語る 」

講師:中井^{なかい}均^{ひとし}氏(滋賀県立大学教授)

1. はじめに

滋賀県立大学の中井と申します。よろしくお願いします。今、司会進行を務めています大下さんが前の職場の岐阜市教育委員会に勤められていた時に、私は岐阜城の指導委員をやっておりました。そのころからのおつきあいで、彼が飛騨市に移って教育委員会でまた文化財の仕事をする中で、江馬と姉小路の城跡について、これから色々を進めるので手伝ってほしいということがあって、寄せていただいたということがきっかけであります。

いくつか山城と一緒に歩いていく中で、「これはすごい」と思いました。何がすごいのかというと、戦国時代の土造りの城の特徴が非常によく残っている、またそれが凄くダイナミックで、壮大と言っても良いのかもしれない。すぐさまその話を、市長と話をしてくれということで、登山靴のまま市長室に行ってお話をしたら、市長は即決で「それは国の史跡にしないといけない」ということを言われました。こんなにご理解のある首長さんはなかなかおられないかと、驚いた記憶を今でも鮮明に覚えております。

今年度からこの古川を支配していた国司・姉小路氏の城館群を国の史跡にしていこうということとです。そのためにはまずきちっと歴史的にも構造的にも調べなくてはならないということで委員会を組織し、先般その第1回目の委員会が行われました。私はこういう委員会に実は今30程やらせていただいております。大概こういう委員会の最初のお言葉をいただけるのは、教育長さんなんですね。基本的に首長さんが出てくることはまずないわ



けです。ところが第1回目の姉小路氏の委員会で、飛騨市の市長さんは挨拶に来てくださった。帰り電車の中で他の委員と、「市長さんが冒頭に挨拶をされる所って無いよな」という話をしながら、「これは本気で我々も向っていかなければならない」と思った次第であります。今日市長さんがおみえになるとは夢にも思わなかったのも、本当にやる気をみせてくれている市だということで、我々委員もがんばってやっていこうと思っています。

そのさなかに、文化庁の調査官が来られて指導を受け、良い感触であったというようなことを聞いております。これはちゃんと調査して報告書を出せば、国史跡を本格的に目指せるのでは無いかなと思っています。飛騨市は数年後には、「江馬氏城館跡」というものと「国司・姉小路氏城館跡」の2つの山城群が国の史跡として活用していただけるのではないかなと思っています。

2. 飛騨の山城研究の歴史について

「飛騨の山城の魅力を語る」ということで、まず地元の方に飛騨の山城の魅力を知ってもらいたいの、今日の私の趣旨です。飛騨は江戸時代から郷土史が盛んに調べられている地域であります。これは特異と言ってもいいかもしれない。飛騨の地域の歴史は、盛んに郷土史家という方々が調べているわけですね。

お城についても、私の大学の研究室の本棚にも鎮座しておるわけなんです、「定本 飛騨の城」という本が1980年代に森本一雄氏によって著されています。飛騨地域だけのお城の本というのが1980年代には著せているわけなんです。これは全国的に見ても先駆的な事例であります。だいたい2000年代に入りますと私も参画しているのですが、近江の城だとか、あるいは出雲の城だとかっていうのが出ているんですけども、1980年代に飛騨だけでお城をまとめられたというのも、これは画期的なことだと思っています。

そして1996年から2005年にかけて、岐阜県教育委員会が県内のお城跡を全部調べるという「岐阜県中世城館総合調査」という調査が行われました。これによって報告書が4冊刊行されています。この調査は日本全国で行われていまして、文化庁の事業としてやっています。最初に行われたのが三重県ですが、報告書は1冊出されました。その後、高知・香川といった県も1冊ずつだったんですね。ところが滋賀県が1300ヶ所の城に対して10冊出したちゃったんですね、空前絶後です。お役所は前例主義ですから、これから出す県としては「えっ」となり、10冊は出せないけど、1冊ではということで、2冊ずつ出すようになったんですね。岐阜県は報告書が4冊刊行していただいていて、その中に約1000ヶ所の城跡が収められています。

その中で大きな成果があった。それはどこにどんな城跡があるのかという分布、つまり2万5千分の1の地形図の中に、ここに城跡があるというのが初めて明らかにされたんですね。それから、その城がどんな姿なのか、城郭研究では「縄張り」と言っていますが、それも一城ずつ明らかになった。資料の図2から順番に載せているものは、岐阜県の悉皆調査で飛騨を歩かれた佐伯さん

の図面を掲載させていただいております。これは公になった報告書の図を載せています。佐伯さんはほぼ一人で飛騨地区を担当され、ほぼ1人で飛騨を歩かれたんですね。私もこの調査に携わせていただいて、自宅が滋賀県なものですから西濃が担当でしたが、飛騨全部を佐伯さんにしてもらうのは申し訳ないので、松倉城と鍋山城を担当させていただきました。（飛騨については）基本的には佐伯さんがすべて歩かれた図面で、どこの地点にどういう形の城があるのか、この報告書ではじめて明らかになったと言っても過言ではないわけであります。

それまでは地元の方も「何も残ってないよ、行っても何もないよ」と言われていた山城が、実は残っているのが明らかになったわけですね。よくよく話を聞くと地元の方は、「石垣もない、天守閣もない」（と言われる）。それはどうやら城のイメージが姫路城や彦根城にあるみたいで、戦国時代の城のイメージというものが、地元でも失われているわけですよ。

城とは、土が成ると書く、土木事業であります。建築ではないわけですね。もちろん天守なんて無いわけですよ。いかに土を削って急斜面をつくりだして、いかに兵隊を駐屯させる平坦な面を造るのか、これが山城の在り方なんですね。

地元の人たちも自分達の山城が忘れ去って、裏山に姫路城があるかのように思われるわけですよ。そんなものは当然無いわけなんですね。自分達の地元にあるのは大したことないんだと思われたんですよ。それが戦国時代のお城の魅力これまで再発見されるまで、長い時間がかかってしまったわけですね。地元の人たちが地元の城に対する誤解を持っていたわけです。「元々、天守閣があったんや」といわれるが、そんなもの最初から無かったんですね。

私自身は、フィールドを持たない、日本列島全部の城跡が見たいということで北海道から沖縄まで城を見に行ったりすると、たとえば道が分からないので道を尋ねます。地元の人はいが「どこからきたん？」「何しにきたん？」「何も残ってないのになんで？」と逆に怪しまれたりするんですね。実は地元の人が、近代以降自分たちの城に対する見方というのを忘れ去ってしまったというのが、中世の山城の近年に至るまでの悲しい歴史があるんですね。

3. 山城の構造

江馬館の背後にある、高原諏訪城の切岸の部分は、断崖絶壁で上が平たくなっている。これが曲輪くるわです。こういうのを山の中で見つけると声を上げてしまうわけですよ。「すごい残りだ」とね。ところが、一般の人が見ると「山やんか」となるんですね。なかなかこのあたりが難しい。

今日は午前中、一緒に山に登って小島城を見ていただいた方は、規模・構造が分かっていただけだと思います。なかなか写真では二次元的なものでは表せないんです。ですが写真だけ見ても、この凄さが分かってくるわけですね。私は山の中ですぐに声をだしてしまうほうなんです、一人で行っても声をだしてしまう。知らない人が聞いたら、山の中で声をだすというのはちょっと変な人ではないかと思われるんですが、（高原諏訪城のような遺構を）見たらものすごく感動するん

です。ものすごく残りが良い。

そういった山城とは、どんなものが少しお話ししたいと思います。岐阜県の悉皆調査で飛騨市の中には39ヶ所の山城が残されているのが明らかになった。しかもそれらは、山の中で当時の姿をそのまま残していることなんですよ。これがすごく大事なんですね。みんな「もう残っていない」とか「昔はこうやったんちゃうか」と言うんですが、基本的にこれが当時の姿です。

木を伐れば、ほぼ当時の姿がよみがえるわけです。「建物ないやん」と言われるけど、建物なんか当時もなかったんですよ。基本的に、この上に楯を並べたり柵を加えるだけなんですよ。天守閣や櫓や漆喰の壁のようなものはないわけなんですよ。まさに土木施設で、私たちはそれを「^{ふしん}普請」と呼んでいる。普請でもって戦国時代の山城は、ほぼ100%成立しているわけですね。

ところが、織田信長の安土城以降は、上の建物(作事)も重要になってくる。なぜかという見せたいわけです。山城は戦いの為につくられた詰城なんですよ。だから、ここには住んでいないわけですよ。高原諏訪城というのは、麓にある江馬館の詰城で、ふだんは館に住んでいて、戦争になると上で立てこもる。普段住んでないから建物は必要ないわけですよ。山城を案内すると「井戸どこにあったんですか」とよく聞かれるんですが、井戸は恐らくない、なぜかという住んでいないからですよ。籠城になると、水を下から汲んであがる。私たちは籠城というと、おそらく100日とか数10日籠城するイメージを持つけれども、ほとんどの籠城戦というのは1日で終わるんですよ。何ヶ月も籠城することは殆どありえないわけですよ。立て籠もる時は、食料と水を持ってあがれば十分対応できるわけですね。

もう一つ申し上げておきますと、ここで籠城した人たちは、「城を枕に討死」なんて考えていないわけですよ。味方が来てくれたら御の字であって、もし来なければどうするか。自分で焼きます。当時の資料には「^{じやけ}自焼」という言葉がたくさん出てきます。つまり負けました、ごめんなさいという意思表示をして自分で自分の城を焼くわけです。後詰めという援軍がくれば御の字であります、こなければ自焼して、あとは没落という言葉が出てきますから、今風でいうと、とんずらするわけです。城を枕にして討ち死にするとか、一兵残らずここで立てこもるというのは、江戸時代の儒教的武士の精神であって、戦国時代の武士は、そんなことは考えてないですね。おそらく逃げると言うのが本当だろうと思うんですね。ですから、山城は住まないと言うことも覚えておいてください。

ところが信長以降の城は、権力者がこんな凄いものを造ったんだと見せびらかしたい、だから天守閣ができる。金箔の瓦を葺くということになります。戦国時代と織田・豊臣以降の城の機能というのは、それまでと全然違ってくる。同じ城ではないわけです。

こういうことが、この悉皆調査で明らかになったわけであります。そしてこの山城の構造は土造りの城なんですよ。土造りの城には、基本形があります。何かというと平坦地、曲輪というのがあります。「くるわ」というと、江戸の遊郭とか吉原とかイメージしますが、その通りで囲うという意味があります。吉原とは囲われている所です。ですから、ここは兵の駐屯地、これを曲輪といいます。

それから堀切^{ほりきり}というのがあります。U字状になったような斜面を堀切という。尾根筋を登ってくる敵に対して尾根を登りにくくする。どうするかというと巨大な包丁でぶった切るわけであり。それが堀切。それからもう一つ土塁^{どるい}というのがあります。土を削って人工的に平坦地を造る曲輪、その土で曲輪の周辺に土壁を造る。曲輪(兵の駐屯地)・堀切(斜断面)・土塁(遮断壁)、この3つが山城の要素だと従来言われていましたが、一番大事なのは何といっても切岸^{きりぎし}ですよ。例えば高原諏訪城の切岸ですが、これはもう登れない、人工的に削りだして斜面移動をできなくする遮断断面を造る、これが後の石垣になっている。これらが基本形で、飛騨の山城はすべて持っているわけです。

次に基本形に「+α」が出てくるわけですよ。例えば防御施設では枳形^{ますがた こぐち}(虎口)というもので、右に折れたり左に折れたりという形をとっている。あるいは^{たてぼり}堅堀というもので、斜面移動を阻止するために^{うねじょうたてぼりぐん}堅堀群(畝状堅堀群)というのも作られているわけがあります。飛騨には、この連続する^{うねじょうたてぼりぐん}堅堀群(畝状堅堀群)というのも作られているわけがあります。福岡県の長野城というところでは200本以上の畝状堅堀群があるんですよ。

さらに戦国時代の後半になると、石垣が使われるんですね。これは切岸を強化する。土をあまり削ると崩れてくるので石にしようとなる。あるいは織田時代になると、今でいう天空の城で有名な但馬竹田城があります。あそこは雲海に浮かぶのもすごいですが、山の麓から見上げた時に、そそり立つような山の上で累々とした石垣が見えると、これは太刀打ち出来ないなと、目に物を見せているわけであり。まさに、権威の象徴として石垣というのがでてくる。そういったのが「+α」というわけですね。

そこで、飛騨の山城を見ていただくと、まず高原諏訪城(図2)は見上げるような切岸でほぼ当時の原形を残してくれている。あるいは深く垂直に切られた堀切。高原諏訪城には二重の堀切がある。堀切を乗り越えても、また堀切がある。まずは尾根を何本も堀切をつくる。傘松城(図3)には、西側に連続して3本の堀切がある。

野口城(図5)を見て下さい。尾根を歩いていると、ここに堀切があるはずと思うと、やっぱり出てきてくれる。そのあたりを分かってくると山城歩きが面白い、戦国人たちの知恵に出会える。彼らの考え方が分かってくるというのも山城歩きのおもしろさですよ。「ここに堀切を設けているでしょ」と思っているとやっぱり出てきてくれるわけですよ。逆に無いと「ん。これは応用問題、何でここにはないのか」というのを考えさせてくれるわけです。

深く垂直に切られた堀切や二重三重に設ける多重の堀切。あるいは飛騨の山城で、よく残っていると思うのは主郭^{しゅかく}の構え方。高原諏訪城では、真ん中に主郭があるんですが、実は天守台のようにそそり立っていて、その下に必ず一周するように^{おびぐるわ}帯曲輪があります。

古川城(図4)もそうなんですね。野口城もそうです。今日行って頂いた小島城(図6)も同じなんですね。小島城は二つそそり立っているんですね。主郭とともにもう一つ大事なものは^{やぐらだい}櫓台であり

ます。この周りには帯曲輪がぐるっと回っているんですね。百足城(図8)もそうなんですね。櫓台が主郭の真ん中にそそり立っているんですよ。こういう天守台のような本丸をポコンと作ってその周りに帯曲輪をまわしている。これも飛騨の城では良く分かるわけであります。

三木氏の城で広瀬城(図7)がありますが、こちら一番左の曲輪では同じような様子が分かっていたかなと思います。このようなのは巨大な戦闘指揮所ではないかと思っています。そしてそれは極めて象徴的な曲輪であり、後の天守台という土壇をここで作っているのかな、と思います。

また、飛騨の山城は分布に大きな特徴があります。飛騨市域の中世城館跡分布図(図1)をご覧ください。これは飛騨市の教育委員会が作成したもので、分かりやすい図です。街道が入っています。峠が入っています。どういう位置に城があるのか良く分かる図面でありますが、●は江馬氏関連のお城であります。○は姉小路氏関連の城跡になるわけですね。飛騨市では大きく2つの分布が認められるわけですが、それらは高原郷の江馬氏と、古川郷の姉小路氏の城だということが明確に分かるわけなんですね。

その姉小路氏なんですが、これは国司^{かみ}なんですね。国司というのは、奈良・平安時代の律令国家の日本で、国の守なんですね。任じられても下向せずに京都に住んでいるわけですね。その国司は武士の時代になると守護にとってかわられます。鎌倉以降は各地に守護が置かれます。室町時代、飛騨の守護は北近江の守護であった京極氏が務めています。京極氏はほかに出雲・隠岐の守護も務め、まず飛騨に来ることはないわけなんです。もう一つ、飛騨を奈良以来の国司として治めたものとして、姉小路氏というのがあるわけですね。姉小路氏はもちろん京都の公家であります。

戦国時代、日本には3つ国司が治めていた国があるわけですね。飛騨の姉小路氏・伊勢の北畠氏・土佐の一条氏ですね。ほぼ守護や戦国大名が領有するなか、彼らは公家の出身である。国司と称して、古代的な官位をもって、中世の領地を治めようとした。

高原諏訪城や傘松城は江馬氏関連のお城であります。堅堀であったり、堀切を使っているんですけども、明確な畝状堅堀群というのは使っていないんですね。

しかし野口城をみていただくと、畝状堅堀群があるわけですね。土塁も使っています。そういう目でもう一度野口城を外観していただきますと、他にも何ヶ所か畝状堅堀を使っているわけですね。この畝状堅堀はその他の姉小路関連の城に見られるわけですね。野口城・向小島城・小鷹利城には見られるんですね。姉小路関連の城に見られる特徴と言っていってもいいかもしれない。広瀬城をみていただくと、城の北側に全部畝状堅堀群を使っているんですね。これは見事な構造で三木氏のテクニクと考えていいのかもしれない。そういう違いが多々見られるわけです。

古川城の枳形、ちょっと石材があります。どうやらここも石垣ではないか。ここにちょっと登り口があります。直角に右に折れて曲輪の中に入っていく枳形なんですね。恐らくここも改修を受けてい

るのではないかと思います。古川城には他にも露頭している石垣があります。

飛騨の山城ですが、全て姉小路氏の造った城なのか、遺構や城の構造から考えていかなければならない。私達が見る城というのは、発掘をしていません。最終年代しか示していない。最終年代は姉小路氏の城なのかというと、実はそのあと南飛騨から三木氏が攻め上がってくる。三木氏は、姉小路氏を滅ぼし、江馬も滅ぼして飛騨の北のほうを全部平定し、飛騨の大名になっていくわけです。おそらくその時に、城を造っているというのは戦略上の一番いい立地です。街道の交差点にあるとか、それを見渡せる山の上にあるとか、街道上に位置しているとか、さまざまな軍事的な要衝に位置しています。攻めた側も当然それを使うわけですね。おそらく姉小路氏の城は三木氏によって占領され、改修されたとみていいと思います。

4. 戦国時代から近世へ

ところが、もう一つこの飛騨にとって大きな(画期)、戦国時代の終演を迎えたといってもいいのかもしれないですが、天正13年に金森長近という豊臣秀吉の家来が飛騨に入ってまいります。そして飛騨を領国化していき飛騨の大名になっていくわけですね。この金森長近が入ってきたとき、それまで三木氏が使っていた城を使わないわけがない。だんだん淘汰されていき、数十あったものが数個になって最後は頂点として高山城になっていくんですけども、当初天正13年に入りこんだところに、何時また反乱が起きるかわからない。三木氏の遺臣が一揆を起こすかもしれない。軍事的緊張関係の中では、彼らの持っていた城を自分の城にしてしまう、反乱を鎮圧するための城にするというのは当然考えられるわけであります。

今見る遺構は、何時のものか少し見ていきたいわけですね。よく議論されますが、飛騨には高山に松倉城という山城があります。見事な石垣の城です。小島城でも見てもらいましたが、長短長短長短と(角を積んで)算木積みになっているわけであります。手を組んだような形になっていて、大変耐久性が高い石垣です。まだ完成されたものでは無いですが、算木積みで積んでいる。それからもう一つは「高石垣」という4mを越える石垣を積んでいる。「何で4mや」とよく言われますが、これは日本列島の中で16世紀前半ぐらいに石垣の導入される地域がいくつかあります。それらの最大規模が4mぐらいなんです。だから、戦国期は4mまでは積める、それ以上積めるのはその後、織田段階になってからなんです。飛騨の城を歩いていると、この松倉城というのは、非常に特異な城である、つまり総石垣の城というのは非常に特異な城であると分かってくるわけであります。おそらくこれは三木自綱の松倉城ではなくて、天正13年に飛騨に進攻してきた金森長近が鍋山城に入る前に、あるいは平行しながら、この高山を支配する松倉に城を構えたのではないかと。高山城に移るまでの金森氏の城であろうと私は見ている。飛騨では最も古い織田・豊臣系列の石垣なのだろうと思っているわけであります。

そういう風に見てまいりますと、飛騨の山城の中に、石垣を用いた城というのがチラホラ出てくる

わけです。例えば先ほどの古川城に戻りますと、斜面にはどうも組んである石垣の面がいくつか出てくるわけです。これは人頭大くらいの石なんですね。僕が古川城で一番感心・感動したのは、本丸の切岸がみごとで、気持ちの良いほどスケールがでかい。これを当初、人工的な土の切岸だけと思っていたんですが、よくよく歩いてみると斜面に点々と石がある、これひよっとしたら石垣やったんちゃうかと。しかも下に結構石が落ちているんです。その石を見ますとかなり大きい。一抱えくらい。お切岸の下に石がゴロゴロしています、単純に考えると切岸の上にあった石垣が崩れて落ちてきたものなんです。この古川城では、人頭大くらいの石垣と、一抱えあるような石垣とどうも2種類あるようなんです。

資料では A 型としていますが、小石材を使った石垣と書きました。これは今見ていただいた古川城や、今日登った小島城の本丸・枡形にいくまでの腰曲輪にもいくつか使われているんだろうなと思っているんですね。

これは今年発掘をしていただいた百足城の石垣(図 8、9)なんですね。小さな石なんですよ。しかも部分的なんですよ。扁平な石材を垂直に積んでいる。極めて特徴的な積み方をしている。これを A 型と呼んでいます。これらは在地の石垣だろうと思います。飛騨特有のもので、姉小路氏のもの、もしくは三木氏のもの。この系譜をどこに求めるか、まさに飛騨は大威徳寺をはじめとする山岳寺院があり、本堂とか作る場合には必ず石垣を積みます。こういった古代末から建立された中世の山岳寺院の存在が飛騨では注目できていると思っています。信長の石垣の前に、日本列島の一部の地域の城では石垣を導入するんですが、それぞれの地域に山寺があつたり、古代以来のお寺が存在する。もともと石垣というのはお寺の技術ということなんですね。近江は先進的な石垣を使う地域でありますけれども、ご存知のように延暦寺があり、天台膝下であります。^{あのうしゅう}穴太衆というお言葉を聞かれたことがあると思います。石垣を積む職人ですね、彼らは比叡山の山麓で石仏や五輪塔をもともと作っていた人達なんですね。お寺の技術はすごく大事で飛騨はその下地がある。

もう一つは、松倉城で見るような数十人でしか持ち上げられないような巨石を用いた石垣があるということです。これを私は B 型と分類しています。この B 型は2つの使い方があります。城域のほぼ全域をこの巨石を用いた石垣にする。松倉城や後の高山城があります。これはどういう意味があるのか、飛騨支配の拠点城郭として築かれたんですね。切岸を保護するだけでなく麓から見えるはずで。権力を誇示できるんですね。支配の拠点城郭、別の言い方で永久築城。恒久的な城作りであって、臨時的では無いということですね。これが B 型の居城的な支配的な拠点城郭に使われる石垣であります。

同じ B 型でも、極めて部分的にしか使わないものもある。それが見ていただいた古川城の転落している石ですね。ほかに今日見ていただいた小島城の(枡形背後の)石垣なんですね。見事に短長短長とわずか4石しか残っていないですが、算木積みを伝えている。これはどこに使われて

いるのかというと、今のところ巨石を用いているのは、極めて部分的な使用。それは虎口の部分、城の門であるということは注目してよいと思います。極めて部分的な使用なんだけれども、門という極めて儀礼的なところに石垣を使うということなんです。これが小島城の石垣の大きな特徴だと思います。この使い方は、松倉城や高山城が永久築城であるのに対して、極めて臨時的に使ったということなんです。門の桁形のところにしか巨石は使っていないわけなんです。それはどういう意味を持っているのか。まさに門に入ってくる人達に見せる、門だけは松倉城と同じで織田豊臣系列の石垣だということを見せたいわけであります。残念ながらまだ真四角の寸法石がとれないということを見ると、文禄や慶長年間までは下らない、天正年間だということが考えられるわけであります。じゃあ天正のいつやというと、飛騨オリジナルの小さな石材を使うのとは違うので、まさに天正13年に飛騨に入ってきた金森長近が、それまでの三木氏・姉小路氏の拠点的城市郭を自分の城に変えたということだと思います。これは金森が積んだ石垣だと私は思っています。松倉と違うのは極めて臨時的なことで、飛騨に侵入してきてドサクサなんだけれども、門の部分だけは儀礼的に作らなアカンということで作ったものだろうというふうに考えて良いかと思います。B型の極めて部分的な使用というのは織豊系城郭としての改修であります。

こういったものが飛騨の城では見えてくるわけであります。今まで記録がない、城の名前が分からないものでも、現地の遺構で確認できるわけです。

5. おわりに

城郭構造から見えてきた飛騨の戦国史、つまりこれまでは残り少ない古文書で飛騨の戦国史というのは語られてきたわけですが、もう一つ、城跡の構造を見ていきますと、城跡は第1級の歴史資料だということがわかって頂けると思います。最終的には姉小路氏の城のいくつかは金森氏によって改修されたんだ、ということが言えるんだろうと思います。これはまさに第1級の歴史資料になるわけですね。そしてそれらをもう少し大きな言葉で表しますと、「飛騨の城から織豊系城郭へ（古川城に見られる2タイプの石垣から）」ということです。これは小島城でももう少し掃除をしてあげて古い石垣が本丸のまわりで見えてくれば、古川城に見られるような2タイプの石垣を小島城でも確認できるかもしれない。

そういった城跡の遺構は見事に残されているわけであります。土造りの戦国時代の城郭の姿がよく分かるわけなんです。切岸や畝状堅堀というのがもうダイナミックなんです。山の上から堀切のところまで行って、上で止まらずに根性出して下（堀底）まで行ってみてください。堀底から振り返った時、切岸に圧倒されると思います。但し、根性出して下りたということは根性入れて上らなアカンということなんです。それを忘れさせてくれるだけの見事な堀切なわけですね。本当にダイナミックとしかいいようがないわけです。

こういった研修はこれから毎年秋に行う予定ということですから、（お城の価値が）地元の方に浸

透していけば、「うちの木やったら切ってもええで」という人が出てくるかもしれない。山城に行って、一番大事なのは眺望です。図1にある街道をどう押えたんや、これを山の上から見たい。残念ながら今は木が生えてなかなか見れないわけですが、よく木を切っている山城に行きますと、本当に山の下が手に取るようにわかる。これはある意味城主になったつもりで、「おれがここを全部押えている」という思いで見えて頂けるとよく分かると思います。城跡からの眺望は、まさに戦国時代が体感できる、これはまさに文句なしです。僕も山城は60歳超えたら辞めようかなと思ってたんですね。平城にシフトしようかなと思ったんですか、今62歳でも登ってしまいます。それはやっぱり、学問をぬきにした迫力・文句なしの眺望に魅力があるんだろうなと思っています。

最後になりましたけれども、今後の保存と活用ということなんですが、もう数年後に国の史跡にしていこうということなんです。これは安心していただけるんですね。他の地域でこういうお話させてもらいますと、いつ潰れてしまうか分からない。これがここではもう史跡指定ということですから、非常にありがたいお話であります。問題は史跡になることが到達点では決して無くて、今度はいかに活用していただくか。これはもう地元の保存会の方々のご努力だろうと思います。行政としては国指定までもっていくという、行政的な力が必要なんですが、最後まで残していくというのは保存会の方々のお力だと思います。酒井さんは2代目会長ということで、まだまだ酒井さんには頑張ってもらわなあかんわけですが、その後3代目・4代目・5代目・6代目の会長さんまで続けていただきたいわけです。滋賀県には小谷城という浅井三代のお城があります。大正9年に小谷城保勝会というのが生まれています。もう100年近い保存活動が続けられているわけです。この小島城でも100年後、「2代目会長さんの時に亡くなった中井さんが説明に来はったな」という学史に残るぐらいの、保存活動をこれからも続けて頂きたいと思います。これはまさに地元の方のご努力に拠らざるを得ないんですけれども、それに少しでも我々もお役に立って行きたいと思っています。

この山城マップも姉小路編ということで、江馬編が今後出ると思うのですが、こうやって作っていただけるというのは、城跡を歩いている人間としては、本当に愛されている城跡やな、というのが分かるわけです。保存は国史跡で間違いなくできるので、今度は活用を、行政と地元と我々研究者とで三輪の如く動いていけると子々孫々伝えていけると思っております。本当に登っていただいて迫力に触れていただきたいと思います。時間がまいりましたのでこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

— 了 —

飛騨の山城の魅力を語る

滋賀県立大学 中井 均

◆はじめに

- ・飛騨は山城の国 ⇒ 岐阜県による県内悉皆調査の成果【高山市(22)、飛騨市(39)、下呂市(31)、丹生川村(11)、清見村(3)、荘川村(3)、白川村(2)、宮村(7)、久々野町(5)、朝日村(8)、高根村(5)、国府町(18)、上宝村(9)：2005年当時『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第4集(飛騨地区・補遺)』による】
※調査は1996～2005年に実施され、地区ごとに計4冊の報告書が刊行されている。
- ・岐阜県の悉皆調査の成果 ⇒ 実数の把握と位置の確認【遺構の図化】
山中に残された山城跡 ⇒ 城は残っていないのではなく、築城当初の土木施設はほぼ完存【飛騨の山城の実態がはじめて明らかとなった】

◆山城の構造

- ・戦国時代の城 ⇒ 土造りの城
様々な防御施設 ⇒ 基本形【曲輪(兵の駐屯地)、堀切(遮断線)、土塁(遮断壁)、切岸(遮断面)】
プラスアルファの防御施設【枡形(虎口防御)、堅堀・畝状堅堀(空堀)群(斜面移動の封鎖)、石垣(切岸の強化、権威)】
- ・飛騨の山城 ⇒ 切り立つ切岸、深く垂直に切られた堀切や多重堀切
主郭の構え方 ⇒ 主郭の裾部を巡る帯曲輪【そそり立つ主郭】
巨大な戦闘指揮所としての主郭 ⇒ 極めて象徴的な曲輪【天守台的な土壇】
- ・飛騨市域における城郭の分布 ⇒ 東側(高原郷)と西側(古川郷)にみごとに分布が分かれる)
高原郷 ⇒ 江馬氏、古川郷 ⇒ 国司姉小路氏(古川・小島・向)【後に南飛騨の三木氏によって併呑】
- ・国司姉小路氏の山城の特徴 ⇒ 畝状堅堀群の多用【野口城、向小島城、小鷹利城】

◆戦国時代から近世へ

- ・松倉城の構造 ⇒ ほぼ城域を石垣によって構築し、中心には天守台を備える
三木自綱の城か？ ⇒ 天守台を有する総石垣の城は他の飛騨の城では認められない

現存する城郭遺構は最後の年代を示すに過ぎない ⇒ 決して有名な城主や武将の時代を示すものではない【現存遺構から語らしめる】

現存する松倉城の構築年代 ⇒ 石垣の構造や縄張り(平面構造)は織豊城郭の特徴を示す【天正13年(1585)に飛騨に進攻した金森長近によって築かれた可能性が大】

- ・飛騨の山城の詳細な観察 ⇒ 石垣の存在が判明【2つの系統の石垣】

a型：小石材を用いた石垣(石積)【広瀬城、古川城、百足城】

百足城で検出された石垣 ⇒ 扁平の石材をほぼ垂直に積み上げる【信濃松本周辺の山城の石垣や、北部九州の山城の石垣と同じ技法】

極めて部分的な使用

在地の技術

※飛騨では大威徳寺のような石垣を備えた山岳寺院の存在は注目される

B型：巨石を用いた石垣(高石垣)

ほぼ全域的な使用 ⇒ 飛騨支配の拠点城郭の築城(永久築城)【松倉城、高山城】

極めて部分的な使用 ⇒ 織豊系城郭としての改修(臨時築城)【小島城、古川城】

松倉城の石垣 ⇒ 隅部に巨石の角石を用いる。石材に矢穴は認められない【織豊系の「織」の技術】

◆おわりに

- ・城郭構造から見てきた飛騨の戦国史 ⇒ 文書以上に語りかけてくれる【第一級の歴史資料】

飛騨の城から織豊系城郭へ ⇒ 古川城に見られる2タイプの石垣

- ・見事に残された遺構 ⇒ 土造りの戦国時代城郭の姿がよくわかる【そのダイナミックさは圧巻！】

城跡からの眺望 ⇒ 戦国時代が体感できる遺跡【文句なしの迫力】

- ・今後の保存と活用 ⇒ 国史跡としての整備活用【江馬氏城館跡】と、史跡指定に向けての調査【国司姉小路氏城館跡】

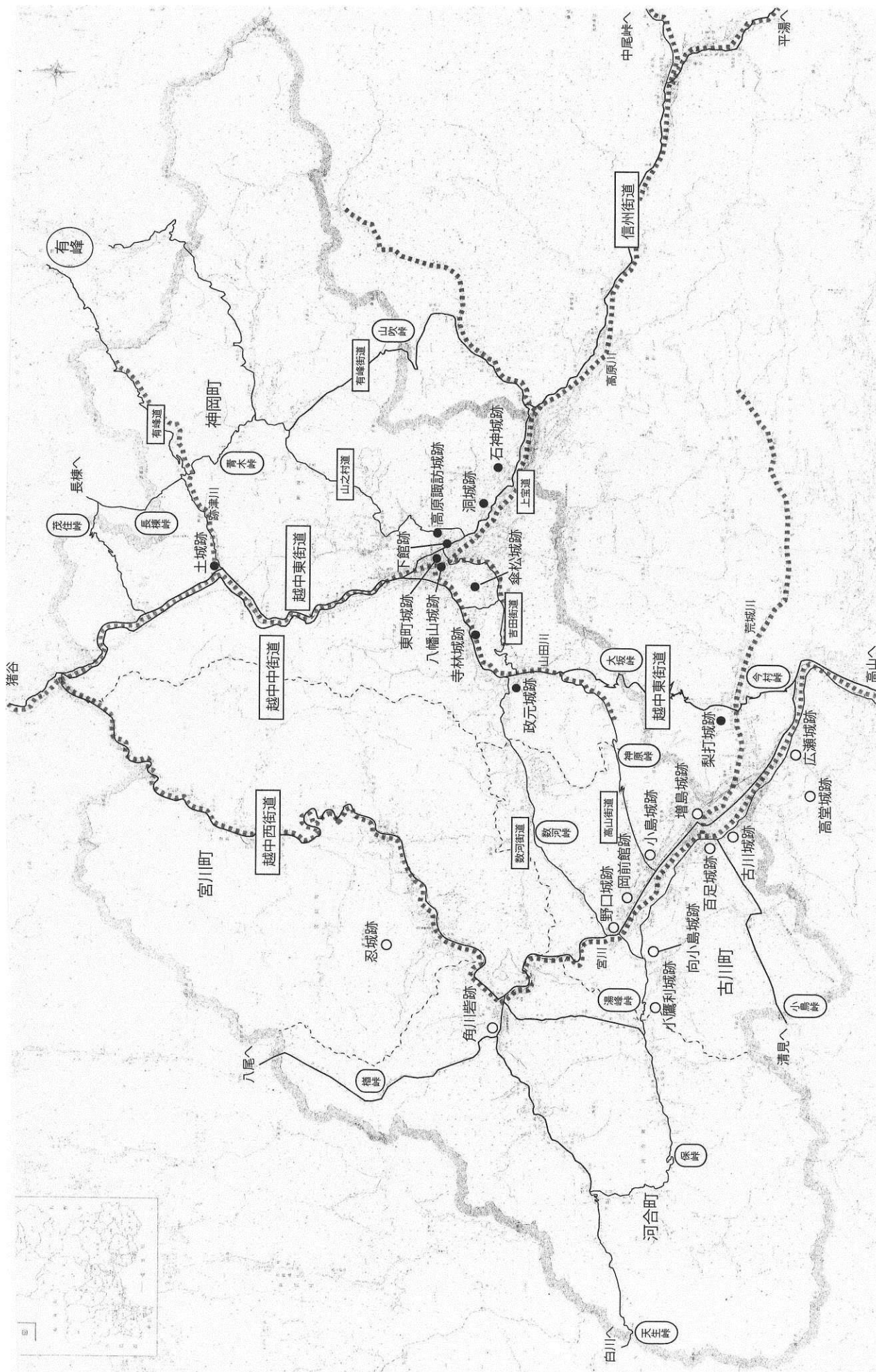


図1 飛騨市域の中世城館跡分布図 (飛騨市教育委員会作成)



図2 高原諏訪城跡縄張図(佐伯哲也氏作図)

※以下、佐伯氏作成の縄張り図は以下より転載

『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第4集』、2005、岐阜県教育委員会

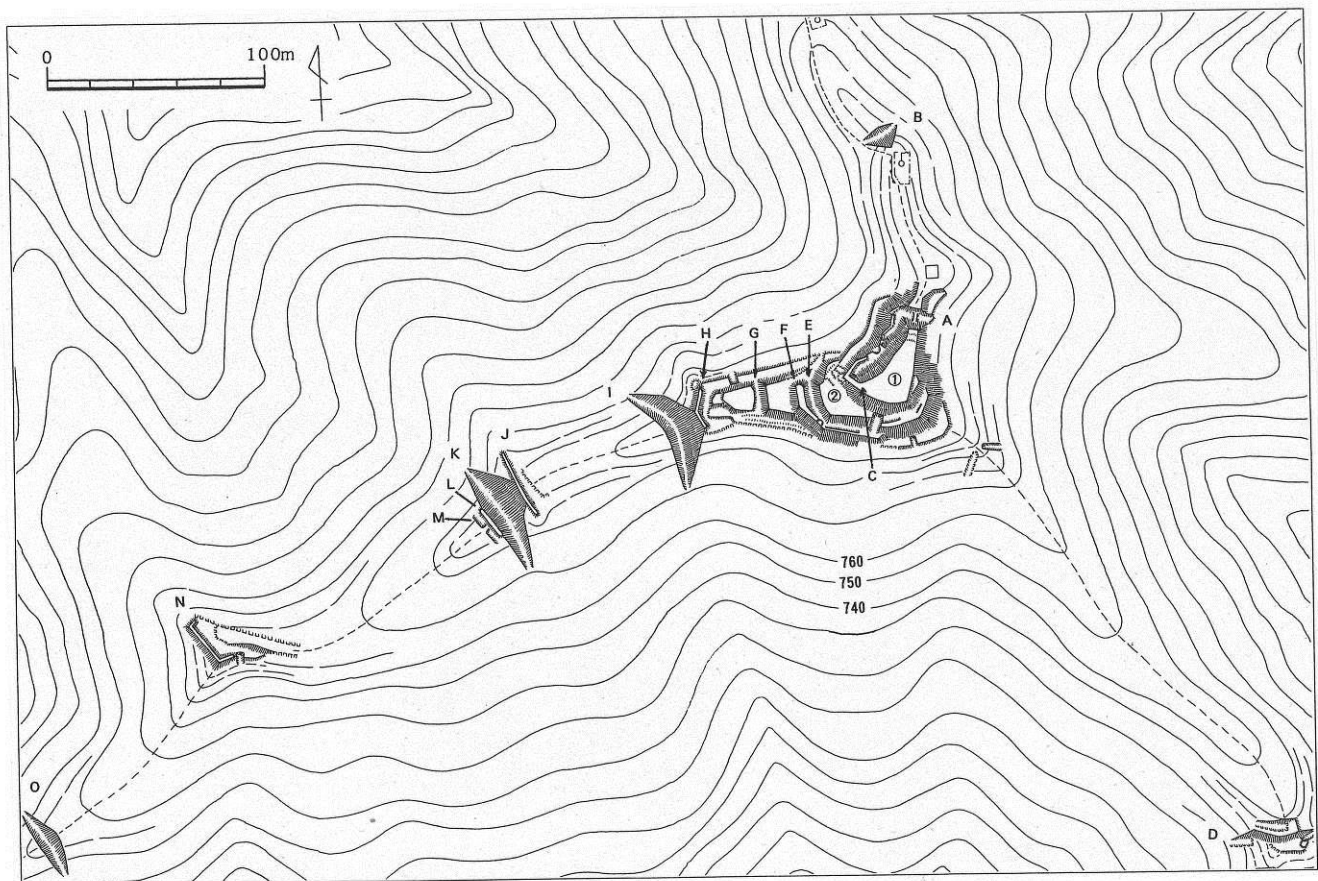


図3 傘松城跡縄張図(佐伯哲也氏作図)



図4 古川城跡縄張図(佐伯哲也氏作図)

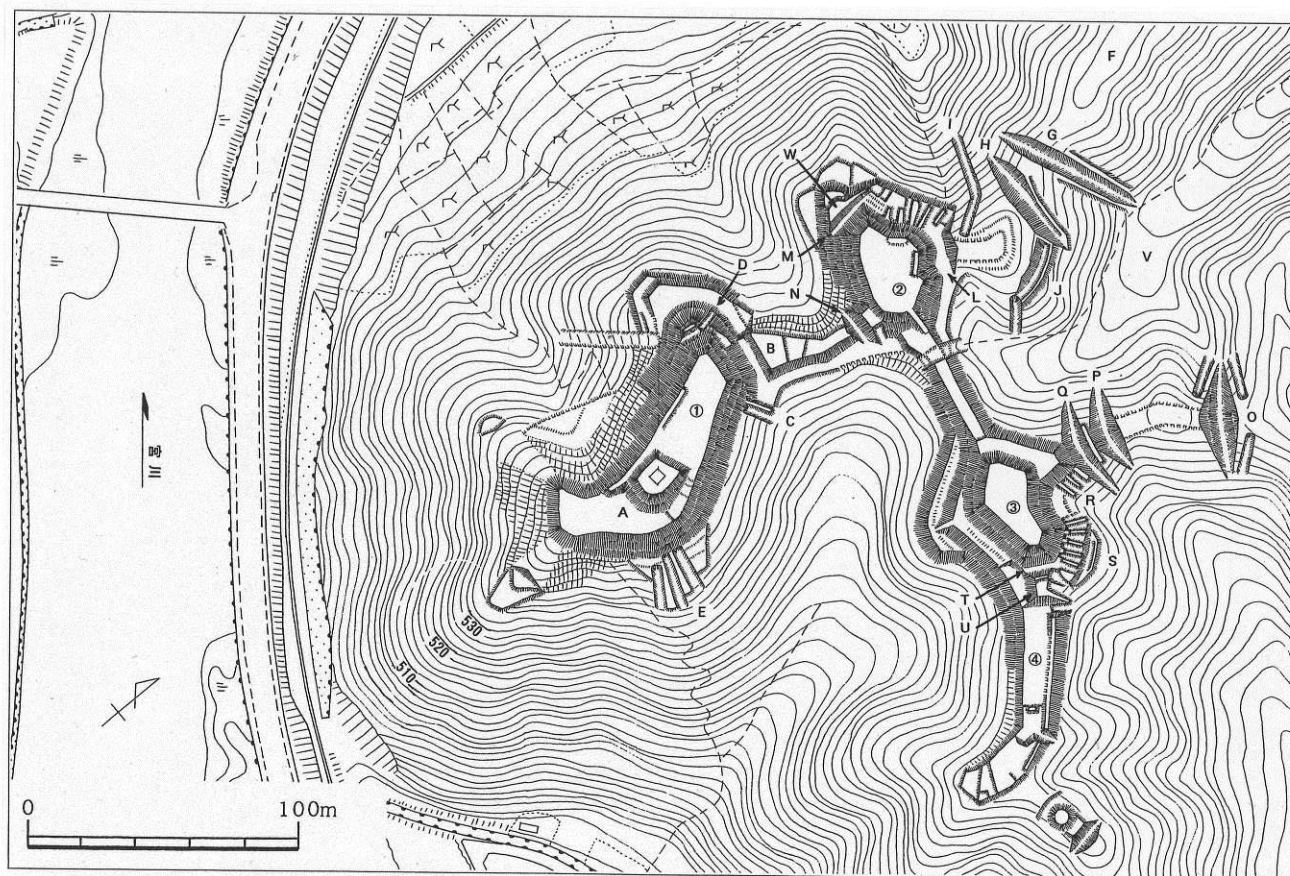


図5 野口城跡縄張図(佐伯哲也氏作図)

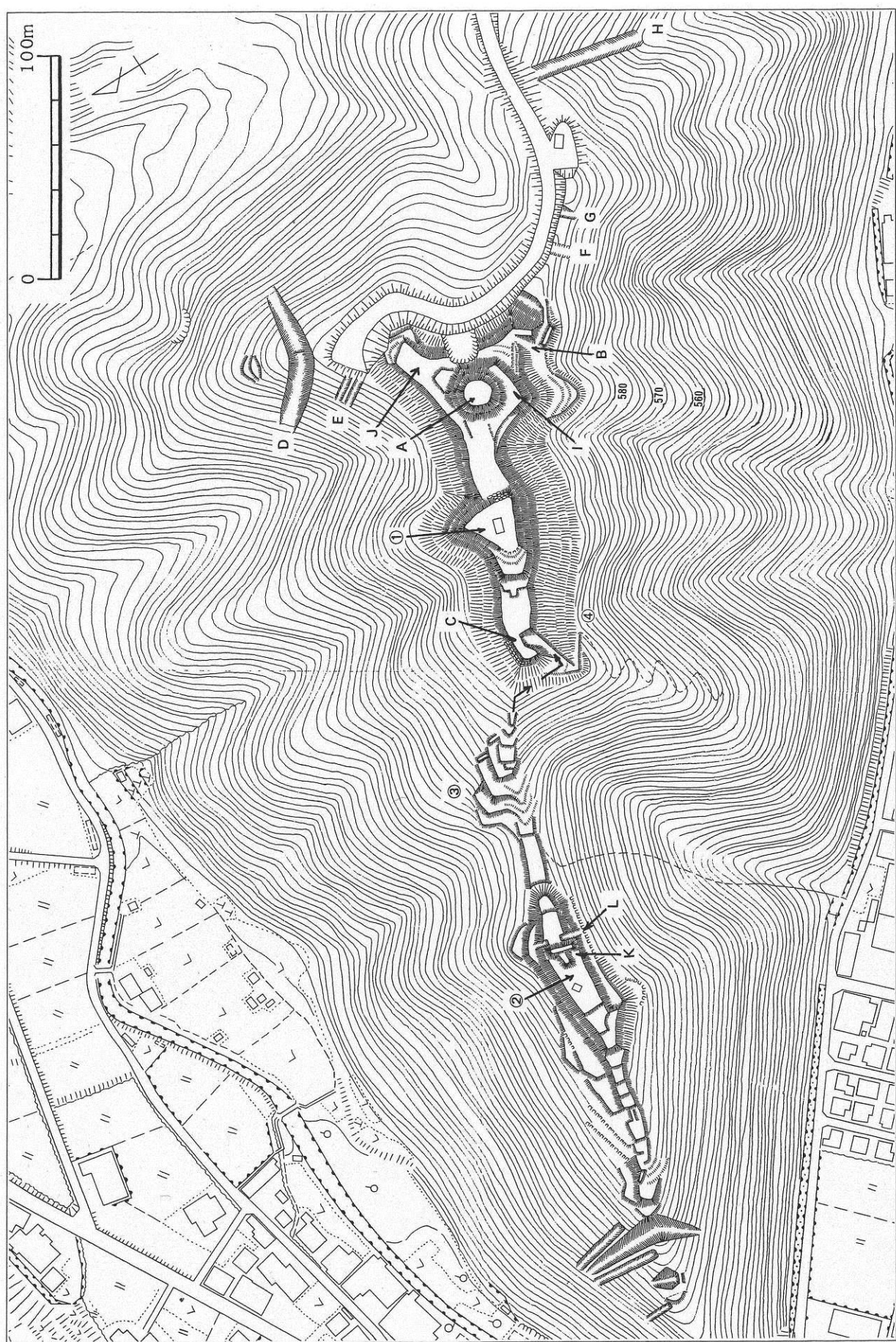


図6 小島城跡縄張図(佐伯哲也氏作図)

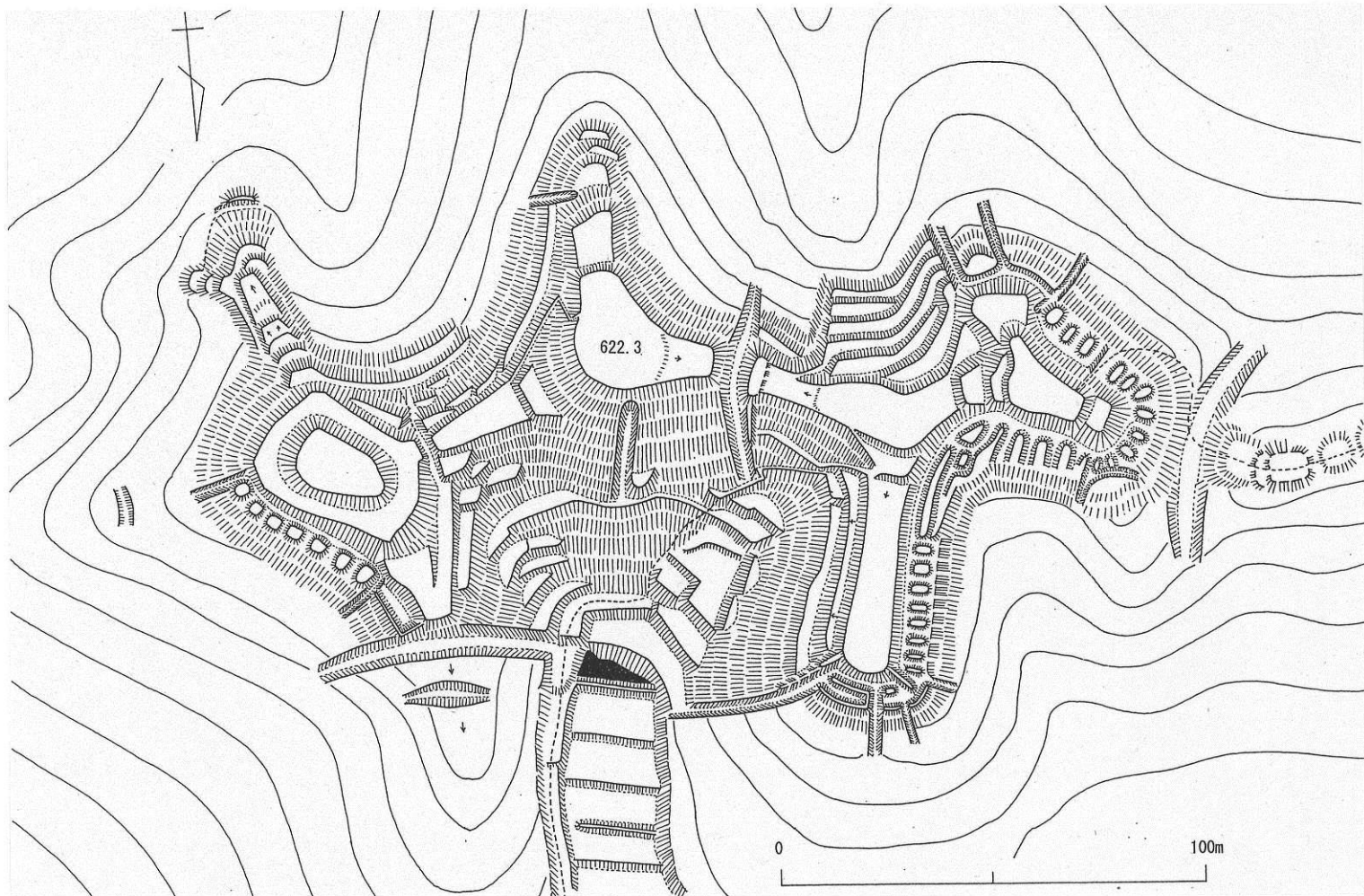


図7 広瀬城跡概要図(中井均作図)

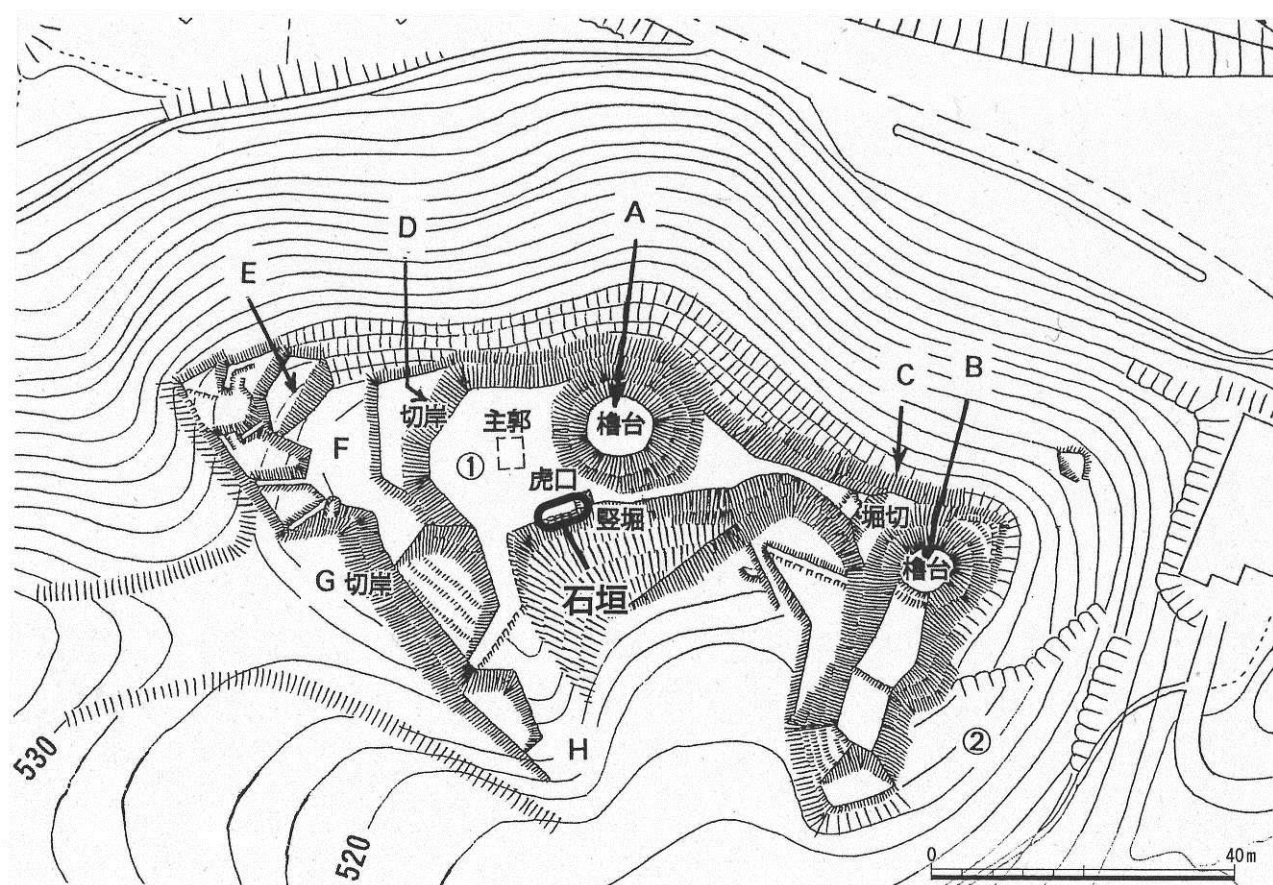


図8 百足城跡縄張図(佐伯哲也氏作図)

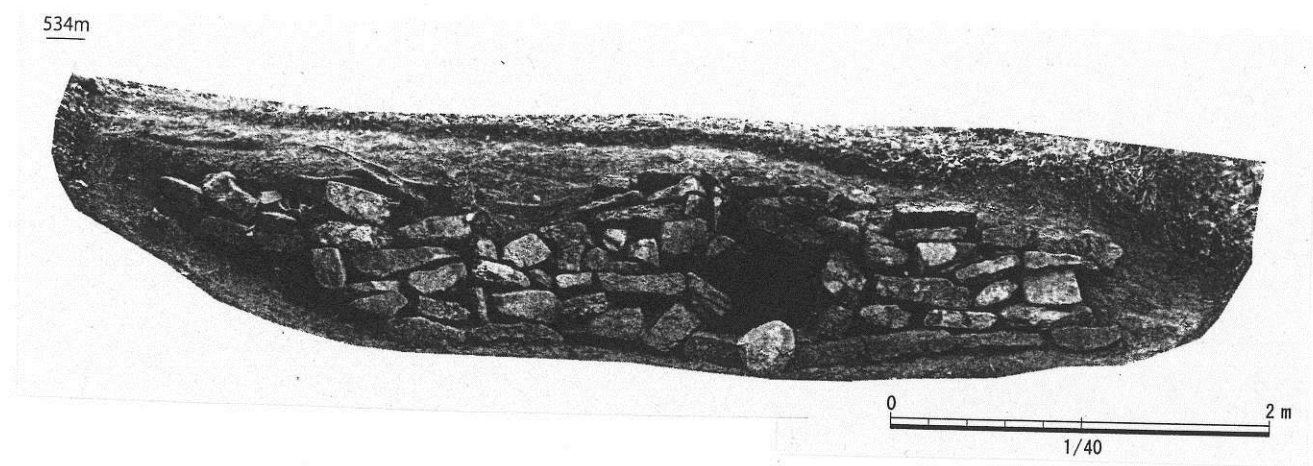


図9 百足城跡で検出された石垣オルソ図(飛騨市教育委員会作成)

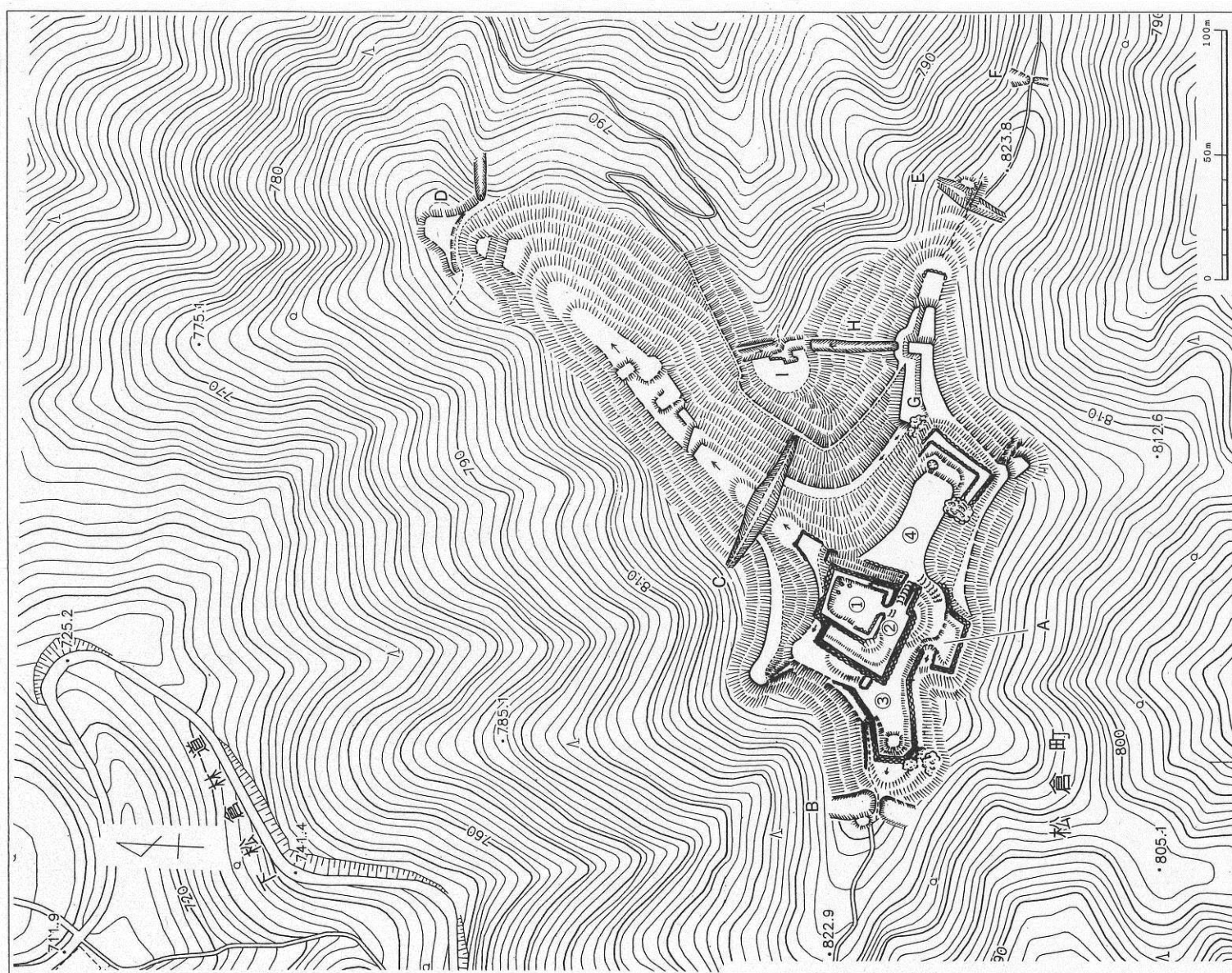


図10 松倉城跡概要図(中井均作図)